

# 儒教の「天」とキリスト教の「天」

平川 祐弘

## はじめに

崔博光教授の招きで、私はソウルの成均館大学校で二〇〇六年七月四日、題に掲げた比較文化の一問題について日本語で講演を行なった。この講演の趣旨の一部は同年十月二十七、二十八の両日イタリアのキエーティで開かれたアレックスサンドロ・ヴァリニャーノの死後四百年を記念して行なわれた学会でも私はイタリア語で発表した。イエズス会の総巡察使アレックスサンドロ・ヴァリニャーノは「適応政策」を提唱した人として知られる。それでヴァリニャーノは東西両洋の対話を始めた人としてイエズス会関係者をはじめポジティブに評価する人が現在には多数を占めている。しかし、ヴァリニャーノのもっとも忠実な弟子であったマッテオ・リッチが東アジアで儒教の「天」とキリスト教の「天」の同一性を説くにいたったのは、宣教上の方便として明の皇帝の改宗をまず意図したからであり、そのためにイエズス会総巡察使の「適応政策」を応用したからであろう。だがそのような「適応」までしてキリスト教の布教を図るということは、はたして健全なことであろうか。それは東西文化の対話などという綺麗事で再定義するべきことではなく、宗教的征服欲のあらわれであったと確認することの方が大切なのではあるまいか。私はそ

のような問題意識をもっていたので、キリスト教の宣教を頭から肯定する立場に与しない。それで二十世紀の後半、キリスト教徒の数が急増したことを特色とする東アジアの国韓国で、建前としては儒学の総本山である成均館大学校で、儒教の「天」とキリスト教の「天」はどこまで同一であるのか、それが全面的に同一だとする主張にはいかなる誤り、ないしはいかなる意図が秘められていたのか、歴史の現場に即して問題提起をこころみ次第である。以下その講演を話し言葉のまま再録させていただく。

朝鮮半島は儒教的伝統の根強い地域です。その中で南の韓国は過去半世紀来、キリスト教の勢力がたいへん広まりました。これは世界史の中でも例外的な特別な現象です。それと申しますのも、私が大学生でありました千九百五十年代には学界の通説は、儒教・仏教・イスラムのような普遍的な大宗教がすでに浸透した西洋以外の地域では新しくキリスト教が圧倒的に広まることはもうないのだ、日本でクリスチャンは一八六八年の明治の開国の後も、一九四五年の敗北の後も、人口の一パーセントを超えたことがないのがその例であるという風に習いました。これはジョージ・サンソムなど西洋の東洋研究者がそう言っていたのであります。言い換えますと二十世紀の半ばまでに、アジアでキリスト教が広まった唯一の国はフィリピンでありました。フィリピンは以前に漢字文化が伝わらなかったから儒教も入らなかった。また仏教はビルマやタイにははいつて根をおろしたが、海をわたってフィリピンにまでは行かなかった。イスラムは南のミンダナオ島へは入ったがそれより北のフィリピン諸島には入っていません。フィリピン諸島には土着の宗教はあつたけれども、儒教も仏教もイスラムもはいつていない。そのような大宗教に対しては白紙、いわゆる *tabula rasa* の土地であつたからこそ、十六世紀フェリペ二世の時代にスペイン人が征服した時からカトリックの勢力がフィリピンには根をおろすことができた、と習いました。宗教的にフィリピ

ンだけは、アジアの中に地理的には位置しますけれども、カトリック化されたという点で、いわば中南米と似たような宗教文化史的状况にあつた、ということがいえると思います。

では朝鮮半島は巨視的に考察するとどのような状況にあつたのか。朝鮮は古くから文化の開けた土地ですが、アジアの中でヨーロッパから一番遠く離れた地域でした。マルコ・ポーロは一二五四年にヴェネツィアに生まれ元の時代、モンゴル支配の中国へ旅し『東方見聞録』に自分が見た中国については詳しく書き、自分が聞いた日本については「黄金の国」などと荒唐無稽なことも記しましたが、朝鮮については目立つような言及はしなかつた。西洋人が製作した世界地図の中で朝鮮半島が現れるのも相対的に遅かつた。西洋人にとって朝鮮が半島であるか島であるか長い間見定めがつかなかつた。西洋と朝鮮との具体的な接触も遅かつた。日本も鎖国していたという点では朝鮮と同じですが朝鮮には長崎に相当するような外国との接点がなかつた。この有る無しが文化史的にはずいぶん影響したのではないかと思ひます。

しかし外国との接触は軍事や武器とも関係します。日本に西洋人は一五四三年に種子島に最初に現れました。彼らが持参した鉄砲を種子島の人は模倣してすぐ作り出し、織田信長の軍隊はそれでもって日本の全国制覇をなしたとげたといわれています。それで鉄砲は日本では当初種子島と呼ばれました。明代の中国は鎖国していましたが、それでもマカオで貿易していました。一六〇一年からはイエズス会士は北京に永住することを得ました。イエズス会士ははじめは明朝に仕え、明が一六四四年に滅びると清朝に仕えました。支配者の歓心を得るために、朝廷に権威を与えるために必要な天文曆象の学問などいろいろ技術援助もしましたが、特筆すべきは大砲を製作したことです。当初は明朝を助け、清朝の天下とみるや今度はその大砲で清朝を助けた。その大砲は仏郎機と呼ばれました。今の中国語では folangji と発音しますが、明代の南では「フランキー」と発音したのではないのでしょうか。これは西洋

人という意味でもとはアラビア語です。イスラムの人々は八世紀にフランスへ攻め込んだ。当時はフランク族と呼ばれていた。だからイスラム圏の人は西洋人をフランクと呼んだ。中国の人はそれを聞いて西洋人を仏郎機と漢字をあてて呼び、西洋人が製作した大砲もまた仏郎機と呼んだのです。一八九四年の日清戦争の時もその仏郎機という旧式の大砲を清の軍隊は朝鮮半島に持って来ました。その時捕獲された仏郎機が九州の宮崎神宮に保存されています。

そのようにして西洋と接触しだした日本や中国に比べて、地理的にも奥まった場所に位置した朝鮮は西洋と直接的に接触することがいたって少なかった。李朝の朝鮮がいつから Hermit Kingdom という呼び方をされるようになったか私は知らないのですが、「隠者の王国」という英語の呼び名は朝鮮が国として世捨て人であるという風に西洋から見られていたことを示唆します。西洋キリスト教世界と一番縁遠い朝鮮半島であると思われていた。その朝鮮半島では二十世紀の前半、日本の植民地支配に対抗する精神的支柱としてキリスト教は力を伸ばしましたが、二十世紀後半、朝鮮戦争以後キリスト教が韓国に急激に広まりました。

しかし西洋キリスト教世界と一番縁遠い朝鮮半島であったということは、裏返していうと、それだけ中国とは密接な関係にあつた、ということでもあります。日本の男は漢文だけでなく平仮名を用いた和文でも文章を書きました。朝鮮の使いと漢詩文の応酬をした十七世紀末の日本の儒者の新井白石は自伝『折たく柴の記』を和文で書いている。ところが朝鮮の知識人は漢文では書いたがハングルではあまり書こうとしなかった。それほど儒教文化と朝鮮半島は密接に結ばれていた。ソウルから北京へ行った使節団の回数、人数、規模は瞠目すべきものがあります。西洋知識すらもその北京ルートではいつてきました。本日お話しする漢名利瑪竇リマオウことマッテオ・リッチも漢文著述でもって西洋を朝鮮に伝えた一人です。

中国と地続きの朝鮮半島は歴史的に儒教の国でした。大学が大衆化した今日、成均館<sup>ソンギョングワン</sup>大学の学生は儒教を学ぼうとして入学した学生たちだけではないでしょう。しかし成均館大学は名前からも明らかのように韓国における儒教の名門大学です。この国に漢字や儒教が伝来した歴史は古い。日本などよりよほど古い。というか日本に漢字で書かれた文化は朝鮮半島経由のものが多く伝わった。そのように海によって大陸と隔てられた日本と違って、朝鮮半島では科挙の制度も行なわれました。それはやはり陸続きのヴェトナムでも同じでした。科挙の試験は聖賢の教えが正しいことを前提に行なわれましたから、儒教は朝鮮半島の両班階級<sup>ヤンバン</sup>の間ではいわば制度化されました。そして儒教倫理はこの国の風俗習慣に根を深くおろしました。韓国の人の方が中国の人より儒教道徳を喧しくきちんと守る、といわれております。孝行は大切な徳目である。祖先崇拜は大事である。先祖の墓は大切である。家は守り続けなければならない。そうしたお国柄でありますから、韓国の人はどうしても儒教と儒教的伝統を大事にする。儒教的伝統に必ずしも全面的に合致しないキリスト教との関係についてはいろいろ考えなければならない立場に立たされているであろう、と私は想像いたします。たとえば廉想涉<sup>ヨムサンソツ</sup>の小説『三代』（一九三〇）にも父が、祖先崇拜を偶像崇拜とみなすキリスト教の信徒となったために儒教徒である祖父との間に生じた葛藤が描かれています。さて仮に私の推測が正しくて、そのような韓国の比較文化的状況であるとする、儒教とキリスト教が両立するかしないかという問題は必ずや本席にお出での皆様のご関心を引くだろうと思えます。この二つの儒教とキリスト教という教えははたして共存可能なのか、不可能なのか、二つの教えのどこが共通していて、どこが異質であるのか。それから本日とくに取り上げるのは、過去において西洋人宣教師のある者は儒教の「上帝」や「天」という観念とキリスト教の God「天主」や「天」という観念の間に折り合いをつけようとした。なぜそんなことをしたのか、それほどまでにして「上帝」と「天主」を同一視しようとしたのは本当にそう思っていたからなのか。それと

もそれは漢字文化圏でキリスト教を布教するための方便であったのか。そういった点についてこれから話したいします。ただし現在の話としてではなく、歴史的な話として、学問的研究の対象としてお話し申し上げます。

私はマッテオ・リッチという明朝の末に中国に入ったイタリア人宣教師について東京の平凡社の東洋文庫から三冊本を出版いたしました。その本は盧英姫<sup>ルイヨシキ</sup>教授が韓国語に翻訳されました。リッチは Matteo Ricci とイタリア語で書きますが、その人の漢字の名前は利瑪竇と申します。中国語では Li Madou と発音いたします。この人は一五五二年にイタリアのマチェラータで生まれ、イエズス会の学校できわめて優れた教育を受け、一五七七年外地宣教を希望、ローマを出発、一五八二年にマカオへ到着、翌年中国の肇慶<sup>ちやうけい</sup>に入り、中国語を習い、詔州、南昌、南京を経、一六〇一年北京に入り、一六一〇年北京でヨーロッパ風様式のキリスト教会の建築を開始したのですが、五月十一日に亡くなりました。西洋人でありながら漢文で本格的な著述した最初の人で、『交友論』とか『天主実義』という漢文の書物、またイタリア語で中国についての大部な報告書を残しました。今日西洋で大学入試にペーパーテストが広く採用されているのはリッチが科挙の制度について詳細な報告を送ったことが遠因の一つとなっております。中華思想に凝り固まっている中国人に世界はほかにもあるぞ、地球は丸いのだぞ、ということを教えるために世界地図『坤輿万国全図』も作っております。その地図は朝鮮にも伝わっております。ソウルから北京に赴いた燕行使にはいろいろな人が付いて行きましたが、北京で朝鮮知識人はしばしば北京のイエズス会の教会を訪ねました。ただしそれはリッチが死んだ後でのことでありました。

ではどうして地球上に西洋の聖書やギリシャ・ラテンの古典知識も東洋の儒教古典の知識も一身に兼ね備えたような「世界人」とでも呼べるような人リッチが出現したのでしょうか。そのような人をこそ私は語の本来の意味で「世界人」onomo universaleと呼びたいのですが、そうした人の出現の歴史的背景をスケッチするところになります。

皆様ご承知のように、コロンブスは一四九二年にアメリカを発見しました。するとその二年後の一四九四年にスペインとポルトガルの両王の間でトルデシヤス条約というのが結ばれ、ローマ法王の裁可を得ました。それはアフリカの最西端のヴェルデ岬諸島から西方約二千キロの経度で南北に線を引き、その経線より東側はポルトガル領、それより西側はスペイン領とするという地球を分割する植民地化の協定であります。南アメリカの一番東に突き出たブラジルが今日でもポルトガル語を話すのは、アマゾン河口がその経線の東に位置していたために南アメリカでブラジルだけはポルトガルの勢力圏と認定されたためであります。その他の中南米諸国がスペイン語を話すのは、そしてフィリピンがスペイン領となったのは、地球の裏側に当たりますが、その島々がトルデシヤス条約で引かれた経線の西側百八十度の範囲内に位置していると認定されたためであります。世界をスペインとポルトガルで二分割するとうたいへんな取り決めでした。イベリア半島から出発したコンキスタドルと呼ばれる征服者たちの後に、ついで今度はカトリックの宣教師たちも中南米、アフリカ、さらには喜望峰をまわってインドのゴア、マラッカ、そしてマカオへと世界大の進出をいたしました。

さてそのカトリック勢力の地球代の進出の尖兵となったイエズス会という教団は、皆様ご承知のように、一五三四年にイグナチウス・ロヨラが結成した反宗教改革、すなわちヨーロッパのアルプス以北のプロテスタント勢力に對抗して構想された組織で、会は英語で言えば company その総長は general といいますが、もともと軍隊用語の「部隊」と「大将」という名前をそのまま用いました。その主要任務の一つはヨーロッパの外へ出かけてカトリックの勢力を拡大しようとした修道会であります。イベリア半島から大西洋を渡って行ったコンキスタドルは物質界の「征服者」でしたが、イエズス会士などの宣教師たちは精神界の「征服者」であつたと申せるかと思えます。

ところで中南米やアフリカで西洋人は軍事的に占領するや、土地の宗教寺院などは破壊し、キリスト教を押し付

けました。相手の文明の度合いが低い時は、そのように一方的にキリスト教文明を押し付けることができました。インカ帝国がピサロによって滅ぼされた話は皆様ご承知のことと思います。イエズス会の宣教師はこうしたコンキスタドールたちにやや遅れて世界各地へ商人たちとともに進出いたします。日本の九州の南の種子島にポルトガル商人が来て鉄砲を伝えたのは一五四三年とされていますが、イエズス会のサン・フランシスコ・ザビエルがキリスト教の布教が目的で鹿児島に到着したのは、その六年後の一五四九年でありました。ザビエルは中国に入ろうとして果たさず、南シナ海の島で一五五二年に死にました。

その次に東アジアの布教の総司令官となり注目に値する人物が一五三九年生まれのアレッサンドロ・ヴァリニャーノ *Alessandro Valignano* であります。一五七六年に中東・極東の総巡察使 *Visitatore* に任命され、ローマからリスボン経由で出発しました。一五七九年から九八年にかけ三回日本にも来ています。当時アジアに来ていたカトリック宣教師の中には中南米を征服してその地に乗り込んだ宣教師と同じような心積もりの人が多かったろうと思います。現にヴァリニャーノの前に日本に来ていたカブラルは土地の人を見下す態度を取っていた。日本人の信者に対しても西洋の言葉を教える必要はない、とか現地の間人が信者になって学問を積んでも教会の要職につけてはいけない、などという差別的態度を維持していました。

しかし中南米と東アジアとは様子が違いました。東洋におけるキリスト教布教には中南米方式は使えない、とヴァリニャーノはすぐさとりました。中南米では原住民の神殿を平気で破壊しましたが、それはコンキスタドールの武力が圧倒的に優位にあったからできたことです。では東アジアではどのような心掛けでどのような態勢でキリスト教宣教に臨まねばならないのか、そういう問題を考えぬき、かつ部下に実行を命じた人がアレッサンドロ・ヴァリニャーノでした。イタリアのキエーティ *Chieti* というアブルッツィ地方の町で一五三九年に生まれました。



リッチの生地マチェラータとそれほど遠くない。十三歳年下のリッチとはイタリア時代からイエズス会の学校で教師と学生の関係で親しく、ヴァリニャーノは日本から四人の少年使節を連れてマカオに戻って来た一五八二年に、リッチをインドのゴアからマカオに呼び寄せました。そして日本と違ってキリスト教が一向に盛んにならない中国のキリスト教化のために、リッチに中国へ入ってまず中国の言葉と文化を学び、中国の人の信頼を克ち得た上で、明の都の北京に定住し、明の皇帝にお近づきを求めて、中国のいわば上からのキリスト教化を計る、という方針を立て、リッチにその実行方を命令いたしました。

ヴァリニャーノとはどんな人であったか。日本からは天正遣欧使節と呼ばれる四人の少年をヨーロッパへ送り込んでローマ法王はじめ各国の国王に拝謁仰せつかるといふ大歓迎を実現させました。これは日本ではキリスト教の宣教に成功している、という西洋向けプロパガンダにも使ったのであります。そしてヨーロッパの国王たちから宣教の資金も拠出してもらおう、という策でしたが、見事に当たりました。対内的というかヨーロッパ本国向けにもこのような見事な演出をしましたが、ヴァリニャーノは対外的というか中国や日本向けにも宣教戦術をよく考え抜きました。九州の大名の家臣の中から四人の日本人少年を選び、ヨーロッパの華麗な文化の優れた面のみ見せて教育する、というか率直に申せば洗脳しようとしたのだと思います。二十世紀の前半にコミンテルンがモスクワに各国の青年を集めて共産主義教育をしたのとそれほど違いはありません。日本では日本側が主体性を持って送り出したかのような「天正遣欧使節」などという麗々しい呼び方をしていますが、そんなものではなかったと私は思います。そのヴァリニャーノがマカオで一六〇六年に亡くなって二〇〇六年がちょうど四百年に当たるので、十月に生まれ故郷のキエーティで国際会議が開かれます。私も招かれましたので、*Valignano e la sua politica di adattamento culturale: l'influsso sul modernizzatore giapponese di Meiji, Nakamura Masanao* という論文を発

表いたします。それで本席でもその要旨をあらかじめご紹介申し上げて皆様の御批判を仰ぎたいと思う次第です。

先ほどもふれましたが、カトリック宣教師はアフリカや中南米では土地の文化を無視して土地を占領して植民地とし、キリスト教を押し付けました。相手を白紙とみなしても構わないという高圧的な態度であります。ラテン語で「タブラ・ラーザ」*tabula rasa*と申します。しかしヴウリニャーノは東アジアに来た時、中国や日本を軍事力で征服するのは難しいと思った。それからアフリカや中南米と違って土地の文化を無視して宣教するわけにはいかない、とも思った。そこでヴァリニャーノが打ち出したキリスト教の宣教方針が適応政策、ラテン語で「アコモダチオ」英語で *accommodation* という方針であります。(近頃は文化人類学の用語の *acculturation* などの語をヴァチカン系統の学者は用いています。)そして中国という現地ですれを実際に行なった最初の宣教師がマッテオ・リッチなのであります。一方的に上から下へ向って法を説かず、相手と対話せよ、相手の文化の中に自分から努力してはいりこめ、という方針です。そういう方針転換をいたしましたので、ヴァリニャーノやリッチは西洋と東洋と対話を始めた人だ、と褒め称える人は褒め称えます。しかしはたしてそう手放しに褒めるだけでよいかどうか。その適応政策には不純な下心はなかったといえるかどうか。

リッチはまず名前も利瑪竇と漢名に改めました。はじめは宗教者として仏教の僧侶の服装をしていた。ところが中国では仏教の僧侶の社会的地位は儒者ほど高くない。皆から尊敬もされない。それで中国内部から一五九二年に一度だけマカオへ出てきてリッチはヴァリニャーノと相談いたします。そしてその正式の承認を得、仏僧の服装をやめ、髪を伸ばし髻を生やし、絹の服を着て儒者たる士大夫らしく振舞うことにいたしました。中国側にはキリスト教の宣教に来た人でなく、孔子の教えを学びに海を渡ってやってきた「泰西の儒者」と見えるようなポーズを取りました。これが適応政策の一面であります。中国は中華思想の国で、自分たちが文明の中心であると思っていま

すから、そこに外国から学びに来る人はいても、教えに来る人はいない、と思っている。ちょうど日本の逆であります。日本では昔から海を渡って教えに来る者は歓迎する。日本人にとって舶来の品物も思想も格好がいい。

ここで適応政策の本題に入る前に中国と日本と外来文化の輸入についてなぜかくも態度が違うのか、日本人の心性の特色にふれたいと思います。東アジアの三国の中で日本だけは大陸と陸続きでない。それだから外国から侵略されたことがたいへん少ない。それで日本人は舶来の思想文物にはすぐ飛びつきます。外国の人間を歓迎するかないかはともかくとして、舶来の思想文物は大歓迎です。十六世紀にキリスト教の宣教師が来た際も中国人はいたつて冷淡だったけれども、日本人はポルトガル商人が持参した商品にも宣教師がもたらした宗教にも非常な好奇心を示して飛びついた。南蛮ブームが起りました。キリシタンも盛んになりました。それやこれやで一五四九年のザビエル来日以来の百年間、徳川三代将軍家光の時の禁教令にいたるまでの時期を西洋の学者の中には a Christian century in Japan 「日本におけるキリスト教の一世紀」などと呼ぶ人もいますが、その呼び方は私見では大袈裟だと思えます。日本人が大勢キリスト教に改宗したではないか、と私に反論する人もいるかもしれないが、しかし当時の日本では大名がキリスト教に帰依すると領民も全員キリスト教に帰依したという風に計算されましたから、信仰の内容は不問に付されています。そうした報告の統計の水増しで西洋では日本のキリスト教化は進んでいると錯覚したままでだと思います。ヴァリニャーノは日本に来て従来の報告は希望的観測に過ぎず、誇大報告だということに気づき、繰返し注意を発しています。なにしろ西洋人の宣教師の中には日本語を習わぬ者もいる。そんな態度をもって外国の思想宗教をきちんと土地の人に伝えられたはずがない。日本人にも中国人にもキリスト教のゴッドが超越的な神だなどということはわかるはずがなかった、と私は思います。なにしろ南蛮と呼ばれたポルトガル人やカトリック宣教師が来日した時、日本人は初めは仏教の新しい一派が来たのだと勘違いしたくらいです。デウスを

ダイウスと発音したので大日如来の信仰かと思いましたが。そうでないとわかって大きな嘘ダイウスか、といったとか伝えられています。九州の西の島の貧しい民にとってはマリア信仰は観音信仰と大差ない有難い教えでしたでしょう。マリア観音というお像が残っていますが、あれはキリスト教徒が正体を隠して地下に潜って信仰を続けるために仏像めかしてマリア観音を作らせたのではなくて、マリア様を観音様の類推で心に描いていたからではないでしょうか。キリスト教というものを正確に把握した上で改宗した人などきわめて僅かだったにちがいません。それから日本人の大名の中には貿易上の利益に引かれてキリスト教徒を名乗った者もいたにちがいない。今から四十年ほど前、文化大革命の最中、中国の南の広州だけで貿易が行なわれていました。日本人の商社員で毛沢東主義者でもないくせに『毛沢東語録』を大きな声で読み上げて中国側のご機嫌を取ろうとした者がいた。毛沢東主義を信じたわけではありません。商売の為ならなんでもやります、という人はどこの国にもいるでしょうが、キリシタン大名の中にもいたに相違ないと思うのです。

それから流行というかファッションの要素もあつたことを見落としてはいけません。平安朝の昔には仏教が入り大流行いたしました。西暦一〇〇〇年ごろに書かれた『源氏物語』を読むと、仏教が、信仰内容も話題とされていないわけではないが、それよりもさらにファッションとして盛んだつたことがわかります。だとすれば西暦一六〇〇年前後の日本でキリシタンの隆盛に流行の要素があつたとしてもなんら不思議はない。ファッションという要素は実はその四百年後の今日も変わりません。西暦二〇〇〇年前後の日本で結婚式が執り行われるのはブライダル・チャペルが一番多い。キリスト教会風の結婚式です。その方が神道に基づく神式の結婚式より多くなつてしまいました。そう聞くと外国人はさては日本ではキリスト教徒が過半数を占めるにいたつたのかと錯覚しますが、日本におけるキリスト教徒の割合は依然として人口の一パーセント以下です。皆様日本へ行かれるとキリスト教会風の

建築を都市部で御覧になります。日曜日には人が集まってくる。そして結婚式が執り行なわれる。牧師のような服装をした人が手に聖書を持っている。人々は讚美歌を歌い、新婦は白いドレスに身をまとうている。ではそのブライダル・チャペルなるものがキリスト教会といえるかという教会ではない。結婚式場です。牧師のような服装をしている人の中には本当の牧師や司祭もいるらしいが、司会者と呼んでいる。教会の入口に立っている黒い衣装の男は教会関係の寺男かというところではない。結婚式場を運営している会社の社員がそうした服装をまとっているだけなのです。

私は半世紀近く前にイタリアへ留学しましたが、当時のイタリアでは役所へ届けを出さずとも、キリスト教会で式を挙げれば結婚は成立したものとみなされてきました。教会で挙げる結婚式はそのように神聖なものです。それなのに今の日本で若い男の大学の助教授と若い女の助教授が帝国ホテルのブライダル・チャペルで牧師さんの立会いで結婚式を挙げた。私は仲人を頼まれたので新郎新婦の少なくとも一人はキリスト教の信者なのだろうと思っていましたが、二人とも信者でないと聞いてひどく驚きました。たいへん軽薄なことのように感じました。しかしキリスト教会風の結婚式は格好がよいと思うと、そういう式がファッションとして日本全体に行き渡る。だとすると平安朝のころから日本で仏教による葬式が取り入れられたのもあるいは同じ心理ではないか、安土桃山時代のキリシタンの流行にもファッションの要素は強かったのだな、と思い返す次第です。

しかしファッションの要素は実は諸外国のキリスト教にもあるのです。クリスマスは米国でも大売出し、クリスマス・セールという商業的的目的のために使われています。私は日本が米国や英国と戦う前に幼年時代を過ごしました。クリスチャンの家庭ではなかったがサンタ・クロースがすこぶる待ち遠しかった。あれは大正デモクラシーの時代に結婚した私の両親が信者でもなくせにクリスマスを祝う都会の風俗にかぶれたからでした。

外来宗教が広がるについては、そのようなファッションという要素もあります。しかし日本では十六世紀の後半、良かれ悪しかれ、キリシタンは人気があった。九州の大名がキリスト教に改宗すると領民も改宗する。イエズス会士はおそらく日本を統一した織田信長を改宗させようと狙いをつけたのでしようが、信長は一五八二年に殺され豊臣秀吉が天下を取ります。秀吉は朝鮮に出兵したので韓国では評判が悪い。秀吉の命令を受けて日本でいわゆる文禄の役一五九二年の第一回出兵に先鋒をつとめたのが小西行長ですが、この肥後半国の領主がカトリック宣教師には評判がよかった。それは小西がキリシタン教徒だったからです。カトリック宣教師たちは小西が朝鮮半島を攻め抜けて明の首府の北京に攻め込んで中国全体をキリスト教に改宗してくれるのではないか、などというおそれた期待を寄せたこともありました。宗教的征服欲というのはおそろしいものです。ちなみに小西行長は豊臣秀吉の家来であったので徳川家康が天下を取った時、捕まりました。自分はキリスト教徒だから自殺できない、というので刑死したということです。

いま中国と異なる日本の外来文化受容の有様についてお話ししました。中国は地大物博とって自給自足していただきますから物質的にも精神的にも自足していて外国には興味がない。そこでリッチは、ヴァリニャーノから適応政策を採るように指示されましたし、リッチもヴァリニャーノの考え方に全面的に賛成でしたから、まず衣服や外見の面で「適応」しました。リッチが一五九四年に仏僧の粗末な服装をやめ、髪を伸ばし髻を生やし、絹の服を着て儒者たる士大夫らしく振舞い出したことは前に申しました。東アジアの人、とくに中国の士人たちが仏教を捨てることはあり得ても儒教を捨ててキリスト教を奉ずることはまずあり得ない、とリッチは確信しました。科挙の試験の合格者たちは儒教を奉じている人々です。そしてその翌一五九五年に南昌で中国の士人や高位の人と友人になり『交友論』という好ましい著書も出しました。利瑪竇ことリッチが書いた漢文の言葉には「天下無友則無樂焉」などと

いうのもあります。日本語で訓読すれば「天下ニ友無ケレバ則チ樂ミ無シ」と読みます。リッチが故郷に送った手紙にはその原イタリア文が *Se nel mondo non vi fosse amicizia, non vi sarebbe allegrezza* に出ています。「朋アリ、遠方ヨリ来タル、マタ悦バシカラズヤ」とは『論語』の巻頭にある言葉ですが、『交友論』の著者ではるかな海を渡って遠方から来た「泰西の儒者」利瑪竇が『論語』の愛読者である中国の士人たちから敬愛されたのは当然であります。

利瑪竇ことリッチは『交友論』以外にもいろいろ書物をあらわしました。明末の学者政治家徐光啓の協力を得てユークリッドの『幾何原本』も訳しております。世界地図も製作してそこに中国人の関心を惹くような面白い情報をいろいろ書き込んでおります。マカオのポルトガル商人たちからひそかに財政的援助を受けていますから金銭面で苦しむことはありませんでした。周囲の中国人はリッチは錬金術を心得ているのではないかと疑った節もあります。北京の宮廷などにいろいろ珍奇な品を送り届けています。自鳴鐘と呼ばれた時計などもそれです。朝鮮半島には北京経由で伝わった自鳴鐘と日本経由ではいった自鳴鐘と二つの経路があるようです。ほかにクラヴィチェンバロなどの楽器も神宗帝に届けられました。先ほども述べましたが、豊後の大名大友宗麟の血筋の伊東マンシヨなど四人の少年は一五八二年にヴァリニャーノの発意でヨーロッパに派遣されました。途中の寄港地で順風を待つのでたいへんな日時がかり、帰国したのは八年後の一五九〇年です。ヴァリニャーノが四人を連れて太閤豊臣秀吉に会いに行き、少年たちが秀吉の御前で西洋の楽器をやはり演奏しています。その成功にかんがみてヨーロッパから北京へクラヴィチェンバロを送らせたのではないか、などとも思います。リッチは万一皇帝陛下の御前に呼び出されることもあるかと思ひ、自分の部下のイエズス会士にクラヴィチェンバロの演奏を俄仕立てで習わせています。(後記。私はキエーティでヴァリニャーノ会議の前夜にクラヴィチェンバロでルネサンス期の音楽が演奏されるのを

聞きました。クラヴィチェンバロがずいぶん大きな楽器であることに驚きました。あれをマカオから北京へ運ぶのはたいへんだったに相違ない。

リッチは日本ではキリスト教がひろまるのに中国ではひろまらない。それで遅れをとったといろいろ悩みもしたと思います。しかし日本には「キリシタンの教えが本当に立派な教えなら、中国人がもう採用しているはずだ」という漢学者も数多くいた。中国という国は東アジアで当時はそれだけ文化的威信の度合いが高かった。それならば中国でキリスト教宣教に成功すれば日本でも必ず成功する、とも思った。それでヴァリニャーノの指示に従って中国上層部に取り入ろうと努力した。ヴァリニャーノは総指揮官ですから日本語とか中国語とか深くは学ばなかったようです。ヴァリニャーノにも漢字の名前というのもあったのでしようが、世に広く知られていない。それにたいしてリッチは利瑪竇として中国の士人たちの間にかなり名を知られるようになりました。漢学に励んだリッチと中国の士人たちはこのような人文の学問における交流においては理想的でした。そして利瑪竇の漢文著述は本人が予測した通り、中国以外の漢字文化圏の国々でも読まれるにいたりました。

しかしリッチの野心というか一番の狙いは北京へ行って明の神宗帝にお目にかかってその好意を克ち得、中国を上からキリスト教化するという望みでした。subversion いまの中国語でいうところの一種の和平演変を狙っていた、といえないこともない。しかし中国側にキリスト教を抵抗なしに受け入れさせるためには、中国で聖賢の教えとして尊ばれている孔子の教えとキリストの教えとが同一であるという前提に立つと話はいへん容易になります。リッチはそのころからキリスト教と儒教の共通性を主張し始めました。リッチは『論語』を読んで「己所不欲、勿施於人」という句が再三出て来るが、これはキリスト教の愛の教え「何事でもひとびとからして欲しいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ」と同じだ、といいました。これも適応ということを考えての発言と思いますが、



本当にそう言っているのか。マタイ伝第七章十二節、ルカ伝第六章十一節に説かれたこの愛の教えは積極的な、それだけに普通の人々にはなかなかできかねる立派な教えです。それは『論語』の「己れの欲せざる所、人に施すこと勿れ」の消極的な、それだけに押し付けがましいところのない愛の教えとややニュアンスを異にします。

リッチはさらに大事な共通点なるものを儒教とキリスト教との間に認めました。リッチはルネサンスのイタリアで文献学 philology の訓練を受けた人です。明代末期の中国では朱子学が行なわれていたが、それ以前の儒教に立ち返り、四書五経に即して勉強した。朱子の解釈はおかしいとしました。そのリッチの考え方には当時の中国の士人もかなり多くが賛成しました。しかしそこでリッチはさらに大胆な一歩を進めて、いうならば神学的にもキリスト教と儒教の共通性を明らかにして世に示さない限りキリスト教は儒教文明圏に根をおろすことは難しい、と悟りました。それで中国の儒教という「天」であるとか「上帝」とは西洋という「天主」と同じである、という実に大胆な説を出しました。これもヴァリヤーノの適応政策を最高度に推し進めた結果だったろうと思いますが、リッチが一六〇三年に北京で印刷し友人に配った『天主実義』という利瑪竇の代表作の第二篇に出て来ます。大事ですから漢文を直接引用すると「吾天主乃古経書所称上帝也」(吾が天主は乃ち古経書に称するところの上帝なり)そして「歴観古書、而知上帝与天主、特異以名也」(古書を歴観して、上帝と天主とはただ異なるに名を以てするのみなるを知れり)と結論しました。当時のカトリック世界には中国語を理解できる学者はほかにいなかったといっているから、リッチは上司の許可は得ずにこのような解釈を行ない、自分が『天主実義』を世に出したのではなく中国の友人が自分の原稿を勝手に木版に彫らせて世に出したのだ、という上司の許可なしで印刷する抜け道を考えたようです。『天主実義』は世間に出回りました。

でははたしてキリスト教西洋と儒教的東洋の相互理解はこれでもって進んだのか。

キリスト教の *Deus* デウスという超越的な神をいかに中国語に翻訳するかはもともと大問題でありましたが、リッチは「天主」と訳した。この言葉は韓国語にもはいつているかと思ひます。日本語にもはいつりました。カトリックの教会はしばしば古風に天主堂と呼ばれます。<sup>ii</sup>

そのキリスト教の「天主」が儒教の「上帝」と同じである、とリッチは述べました。儒教の上帝は天地の創造主ではないからリッチの解釈には無理があると私は思いますが、当時の中国には西洋語のできる人はいませんから、リッチの説明を聞いて、天主と上帝と同じか、それならリッチが説く天主の教えも結構ではないか、と思った中国知識人が何人も出ました。馮応京は『天主実義』公刊二年前に序を寄せていますが「天主トハ何ゾ、上帝ナリ」、徐光啓は「天主トハスナハチ儒書ニ称スル所ノ上帝ナリ」、李之藻は「ソノ教ハ専ラ天主ニ事フルコトニシテ、スナハチ吾ガ儒ノ知天・事天・事上帝ナリ」、楊廷筠は「カノ天主ヲ欽崇スルハ、スナハチ吾ガ儒ニオケル上帝ヘノ昭事ナリ」と解しています。

後代のキリスト教史家の中で熱心な信者の中にはこうした「奉教士人」と呼ばれる中国人をキリスト教に改宗した人のように見做しがちです。リッチのイタリア語の『報告書』にも徐光啓など *Paolo Sincamchi* とクリスチャン・ネームまでつけてある。しかしそれはキリスト教の影響を誇大に報告するものです。「奉教士人」の多くが利瑪竇の主張に理解を示し、友人つきあいを続けたのは、西来の利瑪竇の「天主は中国の古経書にいうところの上帝である」という解釈に従つて、その範囲内で『天主実義』という書物を肯定したまでのことです。『天主実義』を読むと仏教や道教ははつきり否定されているが、天主教の正体をはつきりわかる書物とはいえません。私見では一旦キリスト教に入信した人が、『天主実義』を読めば自分の信仰の立場を確認して強めることはできるが、それ以上のことができず書物ではありません。——キリスト教のカテキズモの書物とリッチ本人はローマ向けに説明した——こ

の『天主実義』は北京で一六〇三年に印刷されるとすぐに日本にもマカオ経由で送られ、翌年には林羅山などはすぐに読んで反論を書いています。林羅山と論争した不干ハビアンという日本人のイエズス会士も無論読んでいました。そして『天主実義』の「吾が天主は乃ち古経書に称するところの上帝なり」という解釈に疑問を呈する人はリッチの後に中国に赴いたイタリア人の宣教師の中からも、また日本にいるカトリックの宣教師の中からも後には出てきました。そしてローマ法王庁でもいろいろ判断が揺れましたが、一七四二年にリッチ解釈は結局否定されました。

しかし『天主実義』を出し、こうした序文や理解ある言葉を寄せてくれる友人に恵まれたのは人間的にはなんといっても幸いでした。知的交流関係に恵まれた。人間今でも外国へ出かけて intellectual companionship に恵まれる学者は多いとはいえません。ユークリッドの『幾何原本』の訳をリッチが作ると徐光啓がその内容を理解した上できちんとした漢文に書いてくれる。またリッチが世界地図を作ろうとすると李之藻がリッチの知識を基に李之藻『坤輿万国全図』を捧げる。その地図のやや異なる版はソウルの南の崇田大学のキリスト教博物館で見ることが出来ます。学者としてのリッチはヨーロッパでは中国研究の祖として記憶されるでしょうが、学者としての利瑪竇は中国でも明らかに成功した。それではキリスト教宣教師としてはどうであったか。

リッチは一六一〇年に亡くなりますが、何が心残りであったかは死ぬ間際に言った言葉が記録されているのでわかります。「自分は顔見知りでないけれども、フランス国王アンリ四世の聴罪師になっていてコトン神父に手紙を書いてお祝いを述べたかった。そして中国における宣教(ミッション)の状況について知らせてあげたかった」と臨終に立会ったデ・ウルシス神父に言ったというのです。そして讒言で「シナ全国が改宗した」「皇帝は改宗してキリスト教徒になった」と口走りました。こうした言葉からリッチが北京でやりとげたかったことはコトンがパリでなしとげたと同じことだった、ということがはっきりわかります。コトンはリッチより十二歳年下のフランス人のイエ

ズス会士でしたが、プロテスタントであつたフランスのアンリ四世王をカトリックに改宗することに成功した人です。すくなくともリッチはそう理解していました。アンリ四世は一五五三年、リッチより一年後に生まれ、一六一〇年五月十四日、リッチの死より三日遅れて暗殺されて死にました。

死にかけたリッチの念頭にあつたのは、自分は中国の皇帝の神宗帝をキリスト教に改宗できなかつた、という無念でした。コトンがフランス国王を改宗させたような仕事はやれなかつた、という残念でした。神宗帝は年号で呼ぶと万曆帝といい、生まれは一五六三年、一五七三年から一六一九年まで君臨しました。しかし中国に二十八年間、北京に十年近くいたけれども、ついにお目通りかなわなかつた。上御一人を改宗して国民全体をキリスト教に改宗するという心の底に秘めた望みがかなわずにリッチは死んだのであります。

その利瑪竇の墓は北京の柵欄墓地にある。この墓は一度目は拳匪の乱の時に破壊されました。義和団の手でその教会にいた中国人教民は全員虐殺されました。二度目は文化大革命の時に破壊されました。中国では義和団はナショナリズムの正義の運動である、と今でも評価していますから、「拳匪の乱」というと叱られます。しかし義和団を正義の運動などと教えるから、その教科書の文面をまじめに習った若者は模範生であればあるほど文化大革命の時も英国大使館に火を放つなどして破壊を繰り返したわけです。そんな義和団を正当化するような教科書の文章は訂正せよ、といった主張をした中国の『氷点』という雑誌は先日発行停止になりました。しかし二度あることは三度、といえますから次はまたいつか愛国主義的排外主義の運動が起こるのではないでしょうか。愛国運動だから乱暴を働いても「愛国無罪」というようなことをいって大目に見て見過ごしてはいけなと思います。なお今はリッチのその柵欄墓地そのものが北京市共産党委員会共産党学校の中にあるので特別の許可がないと見られません。ところが思いもかけぬことが起こった。それは東アジアで皇帝に向つて「キリスト教に改宗するように」という

上書が公にされたのです。これはリツチも予期していなかったことでした。漢文を漢文訓読体にかけて読みますと、この帝国をもし文明開化しようとする真に願うのであれば、

陛下則チ宜シク先ヅ自ラ洗礼ヲ受ケテ、自ラ教会ノ主トナリテ億兆唱率スベシ

という大胆な提言です。先を読みます。

外臣某、頓首再拜、謹ンデ皇帝陛下ニ稟ス。外臣險ヲ遠洋ニ履ミ、来リテ貴国ニ寓シ、頗ル風俗ヲ諳ジ、大ニ事情ニ熟ス。伏シテ惟ミルニ、貴国民人陋ニ安ンジ故ニ泥ムノ習無ク、善ニ遷リ過ヲ改ムルノ風有リ。加フルニ陛下寛心衆ヲ御シ虚懷物ヲ容ルルヲ以テス。寸善必ズ取ルニ、彼我ヲ論ゼズ、一長必ズ収ムルニ、中外ヲ問フコト莫シ。文藝則チ彬彬トシテ日ニ盛ニ、智巧則チ駸駸トシテ日ニ進ム。

この文章は一読すると、西洋からはるかに海を渡って来たキリスト教宣教師が東アジアの皇帝に差し出した上書のように思われます。しかし清朝のシナで「陛下則チ宜シク先ヅ自ラ洗礼ヲ受ケテ、自ラ教会ノ主トナリテ億兆唱率スベシ」というこのような提案をしたらその人は死刑に処されたのではないのでしょうか。いや、李朝の朝鮮でもこのような上書は可能だったでしょうか。その人はさらに西洋の富強を讃え、次のような説明を敢えてしました。西洋に仁人・勇士が多いのはキリスト教精神があるからだ、そればかりではない、西洋文明の物質的繁栄も西洋の宗教に由来しているのだという主張です。

陛下其レ西国ノ富強ナル所以ヲ知ルカ。夫レ富強ノ原ハ国ニ仁人・勇士多キニ由ル。仁人・勇士ノ多ク出ヅル所以ノ者ハ、教法ノ信心・望心・愛心ニ由ルニ非ザル者莫シ。西国ハ教法ヲ以テ精神ト為シ、此ヲ以テ治化ノ源ト為ス。独リ此ノミニ匪ズ。絶妙ノ技芸、精巧ノ器械ニ至リテハ、創造スル者アリ、修改スル者アリ、其ノ勤勉・忍耐ノ大勢力、一モ教法ノ信望愛ノ三徳ニ根セザル者莫シ。蓋シ今日西国ノ景象ナル者、教法ノ草業ノ外茂スル者ニ過ギズ。而シテ教法ナル者ハ、実ニ西国ノ本根ノ内托スル者為リ。

この上書は西洋人が書いたようにみせかけてあるが作者は実は日本人の中村正直です。中村が明治五年、西暦の一八七二年に『新聞雑誌』第五十六号に掲載したものです。

中村正直は一八三二年に生まれ徳川時代の最末期の日本で江戸の昌平黌の御儒者でありました。当時の日本で一番優れた漢学者ということになっていた。その中村は一八六六年、徳川幕府が第一回の留学生を英国へ派遣する時に志願して同行し、ロンドンで一年半勉強して帰国した。そしてジョン・スチュワート・ミルの『自由之理』やスマイルズの『自助論』を訳した。これが日本できちんとした英語の書物が訳された始めです。漢学者が洋行して洋学者になって帰国しただけでも世間を驚かすに足る事件ですが、その儒者が本人もキリスト教徒になったらしいが、さらに明治天皇に向けて「陛下則チ宜シク先ヅ自ラ洗礼ヲ受ケテ、自ラ教会ノ主トナリテ億兆唱率スベシ」と提案したのだから、真に驚くに足る事件です。

中村という当代第一流の学者は徳川幕府側の人でした。一八六八年に帰国した後は幕府方の人々は江戸を追われて静岡に下りました。そこでサミュエル・スマイルズというイギリスのヴィクトリア朝の啓蒙家の *Self-Help* という本を訳した。『自助論』とも『西国立志編』ともいわれます。近代産業国家を建設する秘訣がこの本には出てい

る、というので明治日本の最大のベストセラーになりました。それでたいへん有名となり新政府もほっておけず中村も東京に呼び戻された。そうしたらこの中村がいま述べたように明治天皇に向って日本のキリスト教会の主となりなさいと提案した。天皇周辺の人は相手にしない。世間は苦々しく思ったが、それだからといって中村が罰されたわけでもない。日本は文明開化でそれだけ言論自由の幅がもうひろがっていた。「あなたは儒教を捨ててキリスト教になったのですか」とたずねられると、中村は「いや自分は昔も今も孔子を深く尊敬している。変りはない」と答えたそうです。中村の評判は保守派の間では落ちたでしょうが、彼の翻訳書『西国立志編』は依然として売れに売れた。中村は明治初年の日本で福沢諭吉と並ぶ啓蒙指導家でした。最初に来日した韓国留学生三名のうち二名は福沢の慶応義塾へ、一名は中村の同人社にはいりました。

世間は長い間中村はロンドンへ留学してカルチャー・ショックを受け、それでキリスト教に傾いたのだ、と思っていた。ところが中村が留学してから百年たつて中村家の仏壇から中村が幕府に提出した留学願書の下書きが出て来た。それで中村は渡英する前から西洋文明の形而上の面に深い関心を持っていたことがわかった。推察するに中村は徳川幕府の最高学府の筆頭教授でしたから普通の人は読むことのできないキリスト教関係の漢文の禁書も読むことができたらしい。リッチの協力者でユークリッドの『幾何原本』の共訳者でもあった徐光啓の文書を読んでいたことは確実です。中村は明治になってからウィリアム・マルチンが漢名丁韞良で著した『天道溯原』に訓点を付して復刻しましたが、それはこの本が中村にとって大切な書物だったからです。その中に「明大学士徐光啓奏留天主教疏」というのがはいっている。徐光啓は明末礼部尚書という国務大臣級の地位を占めた学者政治家です。リッチより十歳年下で一五六二年に生まれ一六三三年に亡くなりました。その徐光啓が中国に天主教を奉ずる西洋人を引き留めるよう皇帝に上疏文を出しました。それが『天道溯原』に収められている。その漢文を訓読するような

ります。徐光啓はリッチ以下のことをたいへん褒めている。そして天主教徒と天に事える彼ら天主教徒と天に事える孔子教徒とは互いに相符合すると徐光啓は述べている。徐光啓はリッチの「吾天主乃古經書所称上帝也」を信じてしまった人なのです。

ソノ道ハナハダ真、ソノ守ハナハダ嚴、ソノ学ハナハダ博ク、ソノ識ハナハダ精シ、ソノ心ハナハダ細、ソノ見ハナハダ定マル。彼ノ國中ニ在リテ亦タ皆千人ノ英、万人ノ傑、數万里東来スル所以ノ者ハ、ケダシ彼ノ国人ヲ教ユル、皆務メテ身ヲ修メテ以テ天主ニ事フ。中国聖賢ノ教、マタ皆身ヲ修メテ以テ天ニ事フ。理アヒ符合スルヲ聞キ、是ヲ以テ辛苦艱難、危キヲ履ミ險ヲ踏ミ、来ッテ相ヒ印正シ、人人ヲシテ善ヲ為シ、以テ上天人ヲ愛スルノ意ニカナハシメント欲ス。ソノ説、上帝ニ昭事スルヲ以テ宗本トナス。

幕末期に開国派の中村はこのような説にひそかに注目していたに相違ない。彼らの説は「上帝ニ昭事スルヲ以テ宗本トナス」だと徐光啓は理解しました。そして中村正直もどうやらそのように理解したに相違ない。そして中村はロンドンに渡つて徐光啓が述べたことは正しかったのだ、と再確認したのです。

中村正直は一八六八年ロンドンから帰国すると『敬天愛人説』をまとめました。「敬天愛人」という言葉を座右の銘にした人が二人います。一人は西郷隆盛で、いま一人は金大中前大統領です。中村が帰国して静岡の田舎に隠棲した時、勝利した官軍の大将の西郷は部下を中村のもとにつかわして中村の説を聞き感心して座右の銘としました。金大中前大統領がどこからこの言葉を持ってきたのかは知りませんが、大統領に当選した時、表敬訪問した小淵外務大臣に「敬天愛人」の四文字を示したので日本ではたいへん話題となりました。世間は長い間中村はロンドンへ



留学して、そこでキリスト教の西洋にも儒教の東洋にも通用する「敬天愛人」という観念をみつけたのだ、と思っていた。ところが先の徐光啓の文章に「天主ニ事フ」「天ニ事フ」「人ヲ愛ス」という言葉が出て来る。徐光啓の説は四文字で示せば「事天愛人」ということになる。そして「天ニ事フ」と「天ヲ敬ス」は漢字は違うが、意味はきわめて近い。中村は渡英以前から「敬天愛人」「事天愛人」という考えをどうやら胸に秘めていたのでした。

中村はサミュエル・スマイルズが一八五九年に出した *Self-Help* を帰りの船の上で読み、明治三年に訳しましたが、その本の冒頭に掲げられている *Heaven helps those who help themselves* という格言を「天ハ自ラ助クルモノヲ助ク」と訳しました。この「天」という語に韓国の皆様は何をお感じになりますか。私はこの「天」という語に儒教でいう「天」や日本人が「お天道様」という時に覚える神道的な「天」を感じます。しかし多くの西洋人は *Heaven helps those who help themselves* の *Heaven* にキリスト教の *Heaven* を感じるのではないでしょうか。それは *God* と同じ意味です。それというのもこの格言はそれより百一年前の一七五八年にフランクリンが *Poor Richard's Almanack* という曆に印刷した時は *God helps them that help themselves* という形だったからです。 *Heaven helps those who help themselves* の方が [he, he, he] という同じ発音が三回繰返されるから、調子がいい。それでいまでは *Heaven helps those who help themselves* が人口に膾炙しています。中村正直自身はこの格言を訳しながら儒教の天もキリスト教の天も同じだという感を強く抱いたに相違ない。「天ハ自ラ助クルモノヲ助ク」と訳したことにより、中村は「敬天愛人」という理想は儒教を奉ずる人にもキリスト教を奉ずる人にもひとしく通用する教えだという信念を強めたことと思います。

このスマイルズの『自助論』という書物は明治日本建設の上できわめて大切な役割を果たした一冊です。それに注目した韓国の人は崔南善でした。チェ・ナム・ソンは日本で中村正直の翻訳を出した出版社秀英舎に援助を乞い

ソウルの自宅に印刷所を設け雑誌『少年』を発刊しました。そしてそれに日本語からの重訳で『自助論』を途中の第六編までですが朝鮮語訳で連載しました。スマイルズの本は self-help, national and individual という副題がついている。個人の自助自立を願う者は当然民族の自助自立を願います。崔南善が一九一九年に『独立宣言書』を起草したのはスマイルズや中村正直を読んだことの必然的な帰結かと思えます。

では最後にキリスト教の天主と儒教の上帝は同じでしょうか。ローマの法王庁が一七四二年にリッツの解釈を結局は否定したことは先に申しました。中村正直はプロテスタント系の西洋人ともつばら交際してカトリックの人とは付き合いが薄かったから、利瑪竇が主張し、徐光啓などが漢文著述で述べた両者の同一性を認める説がローマではとつと否定されていたことを知らなかったのではないか、気が付いたのはだいぶ後になってからではないか、あるいは終生気が付かなかつたのではないか、と察せられます。中村としては天に事えることと天主に事えることは同じだから自分は儒者のままキリスト教徒になつたのだ、と自分で自分に理屈を説明して納得していたわけですから、両者は違ふといわれると困ってしまう。しかしカトリック側は、利瑪竇の『天主実義』が明治十八年、西暦の一八八五年に東京で訓点を振って復刻される時に手を入れました。序文に馮応京が「天主何、上帝也」と書いてあった。これは具合が悪いと思つて勝手に「天主何、天地人物之上主也」と改めました。馮応京はとつと昔に死んでいるから彼に無断で改竄したのです。そうしたことは中村正直の耳にもはいつたのでしょうか。はいらなかつたのでしょうか。中村正直がキリスト教に改宗したことは明治の日本でキリスト教宣教の最大の成果のようにはいわれました。しかし中村のキリスト教に対する同情は次第にさめ、一八九一年に中村は亡くなりますが、遺言により葬式は神道で執り行なわれました。

さて皆様儒教とキリスト教は両立するとお考えになりますか。儒教の天とキリスト教の天には重なるところが多

いとは思いますが。しかしリッチのように「吾天主乃古経書所称上帝也」(吾が天主は乃ち古経書に称するところの上帝なり)そして「歴観古書、而知上帝与天主、特異以名也」(古書を歴観して、上帝と天主とはただ異なるに名を以てするのみなるを知れり)と言ったのは、リッチが本心からそう思ったのか、どうか。それともヴァリニャーノの適応政策をリッチ流に按配したまでだったのか。おそらく後者であったのでしよう。リッチは儒教を無視しては中国でキリスト教を布教することなどできないと思った。しかしそうはいつでもどうしても中国人をキリスト教に改宗させたい。そのためには儒教の「天」とキリスト教の「天」は同じだというよりほかに手はない。しかしリッチがともかくにも明の皇帝をキリスト教に改宗させよう、という下心で上帝と天主とは同じだと強弁したのだとすると、リッチはいかにも Jesuitic であつた、ということにもなるかと思ひます。ちなみに Jesuitic な( )は Jesuitical という形容詞は「イエズス会の」という意味と同時に「陰険な、詭弁を使う」という意味でも世間には広く使われております。

i 話の本筋からはずれますが、友情は尊いものです。とくに国籍を異にする人々が友情で結ばれることは、人類の未来に明るい光をともしてくれるものではないでしょうか。皆様も日本語日本文化を学ばれる過程で日本の友人と親愛の情で結ばれると人生に楽しみがふえることと信じます。私も崔博光先生に親しくさせていただいて多くの楽しみを得ました。

ii しかし後にプロテスタントは Deus すなわち英語の大文字の God を「神」と訳しました。そのために日本では混乱が生じた。キリスト教の神は人間を創つたが、それは生殖行為によるものではない、ゴッドとアダムとエバの子孫との間には血のつながりはありません。その人間は死んでも神様にはならない。ところが日本の神道では神様はご先祖様で血のつながりがある。日本の神道はいつてみればアダムとエバを神様に行っているような先祖崇拜の宗教です。生きている人もやがて死ぬと神様になる。子孫がご先祖様として神棚に祀ってくれるからです。